# 発掘ニュース

第 24 号

平成 元 年 8 月 19 日

発行 財団法人いわき市教育文化事業団
TEL 0246 (23) 9348


## 荒田目条里制遺構・砂畑遺跡

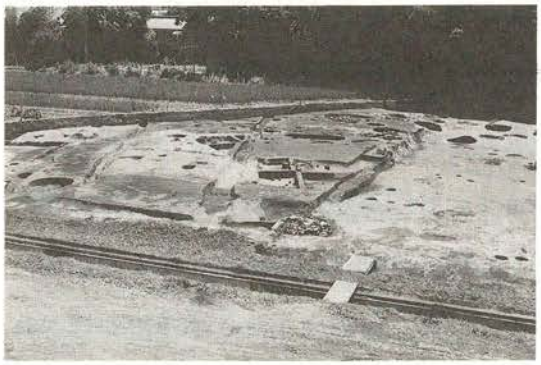
【遺跡の概要】荒田目条里遺跡は古代の水田の区画整理が残されている遺跡で、いわき市平荒田目から菅波にかけて位置し、太平洋へと注ぐ夏井川の南側に広がる広大な水田地帯の一部を占めています。砂畑遺跡は荒田目条里遺跡に囲まれるように位置し、以前から弥生時代や古墳時代の遺物が出土することが知られていました。このたび、常磐バイパスの建設によってこれらの遺跡が壊されてしまうため、遺跡の記録保存のため平成元年５月から調査が行われています。

現在は砂畑遺跡を中心に調査が進められており、今までに弥生時代から近世にかけての遺構・遺物が数多く発見されています。特に、古墳時代の円墳の周構や、非在地系の土器が発見されたことは、大変重要なことです。調査は平成２年３月末まで行われる予定で、今後は荒田目条里遺跡を中心に調査が行われるようになりますが、試掘ですでに古代の水田跡や住居跡があることが確認されているので、大きな成果が期待されています。

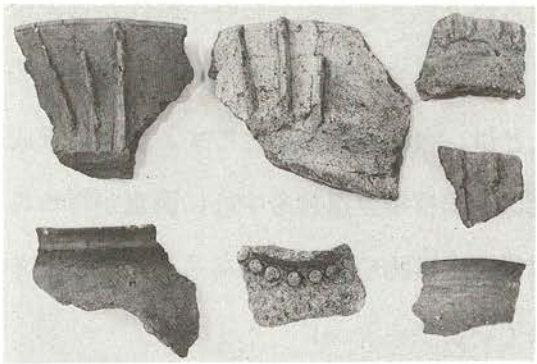
第一号土坑内遺物出土状況（古墳後期）

とじておきましょう

【発見された遺構・遺物】砂畑遺跡からは弥生時代の住居跡・土坑、古墳時代の住居跡・土坑・円墳の周溝、奈良・平安時代の住居跡、近世の屋敷跡・井戸などが発見されています。その他にも時期は明確ではありませんが、溝や柱穴などが数多く発見されており、これらの遺構は狭い範囲でいくつも重なり合っています。特に注目されるのは周溝で、砂畑遺跡で２基、荒田目条里遺跡の西端で１基検出されており、人を埋葬した主体部はまだ確認されていませんが、出土遺物や周辺に点在する遺跡などから考えて、この周溝は円墳の周溝であった可能性が強いと思われます。



砂畑遺跡風景

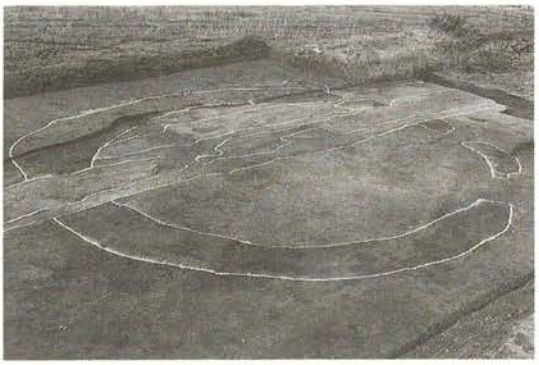


非在地系土器（古墳時代前期）

遺物も弥生時代から奈良・平安時代にかけての土器・石器・土製品などが多数出土しています。弥生時代では、中期の龍門寺式と呼ばれる朱塗りの土器や、石鏃・磨製石斧などが出土しています。古墳時代になると遺物の数も種類も多くなり、土師器や須恵器の他に、朱塗土器・器台や異形器台・小型壺・双孔円板や小玉などの石製模造品・埴輪片・直刀などの祭祀的な遺物も多く出土しています。また、土師器の中には東海や南関東の特色を示すものがあり、

第５号住居跡（古墳時代前期）

これらの非在地系土器によって当時の人々の移動の様子をうかがうことができます。奈良・平安時代では土師器・須恵器・瓦片などが出土しており、線刻の文字瓦もあり、平下大越地区にある根岸遺跡や夏井廃寺との関係の深いことが考えられます。また、近世になると高沢屋敷と呼ばれていた士族の屋敷があったと言い伝えられており、相馬大掘焼の陶器が大量に出土しており、近世陶器の産地と消費地の関係を示す良好な資料となっています。



周溝（古墳時代後期）

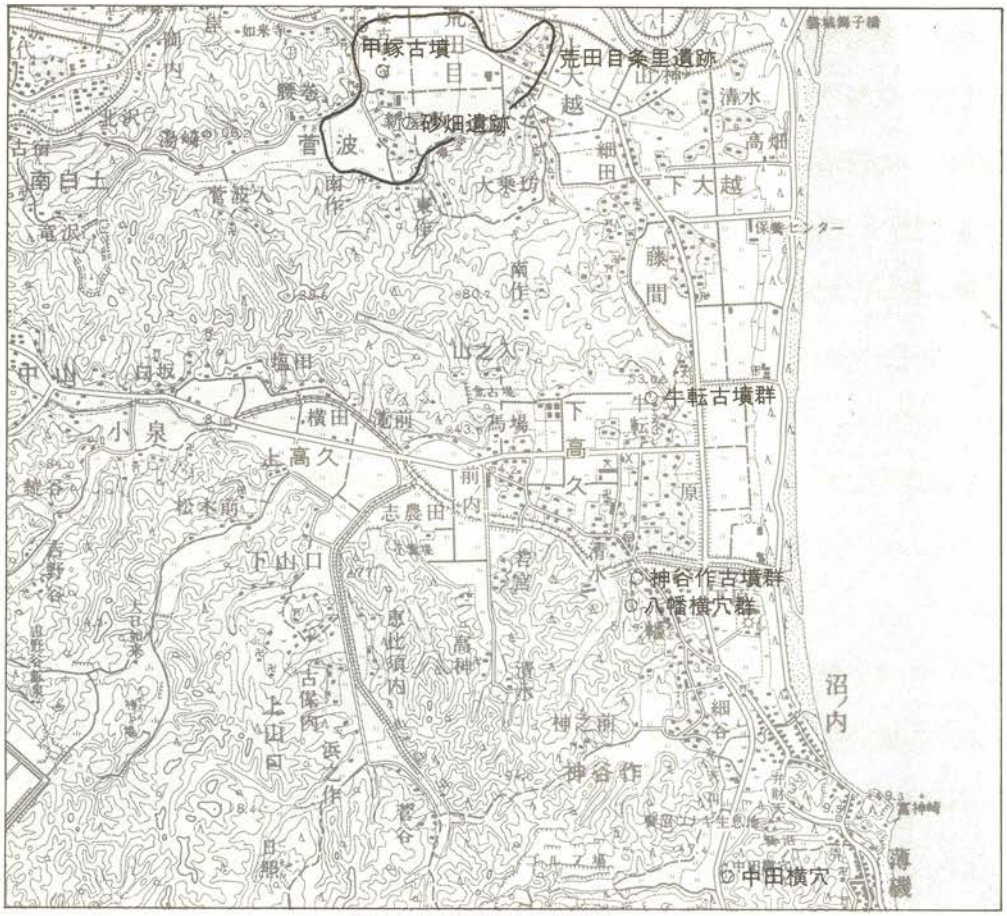
砂畑遺跡は、地質学的研究によると、約4000年前は海岸の波打ち際の砂浜でした。やがて海岸線が後退し、弥生時代になると人が住み始め、古墳時代には円墳がいくつも作られるようになり、奈良・平安時代になると再び人が住むようになり、近世そして現在へと人々の生活が営まれてきた様子がわかります。

井戸跡（明治時代）

【古墳時代の夏井地区】古墳時代とは、その名の通り古墳が造られていた時代のことです。今から約1700から1300年ほど前で、いわき市内にも多くの古墳や横穴が造られました。最初は巨大な古墳が単独で造られていましたが、古墳時代も終末になると、小規模の円墳が数多く造られ、

大堀相馬焼土瓶（幕末～明治時代）

群集墳を形成するようになります。荒田目地内にある国指定史跡の甲塚古墳もそのような古墳時代後期の小規模な円墳の一つであったと思われます。今回の調査では３基の円墳の周溝と思われるものが検出されていますが、周辺を調べると箱式石棺やくり抜石棺が畑の中に露出した状態になっているところもあり、甲塚古墳も含めて荒田目から菅波地区にかけて群集墳が存在していた可能性も考えられます。周辺には甲塚古墳の他にも人物埴輪の出土した神谷作古墳群や牛転古墳群、金銅製の装飾品が多数出土した八幡横穴群、装飾横穴として有名な国指定史跡の中田横穴などがあり、その他にも古墳群や横穴群、また古墳時代の遺物が出土する遺跡なども多数点在しており、「文化財の町・夏井」と呼ばれるのにふさわしいと思われます。




夏井地区周辺の遺跡

とじておきましょう